

PCの非公開情報

PC①／情報深度：1

君が幼い頃、母と離婚して去った実父は料理人だった。その後すぐに母は再婚したので、君はそちらの方を父として認識している。実父がいなくなったのは君が物心つく前だったので、顔は覚えていなかったし、母から聞かされるまでは実父が料理人だったことも知らなかった。今にして思えば、君が料理をするのを母があまり喜ばなかったのは実父のことがあったからなのだろう。

そんなことも知らなかった頃の君は、好きなことの延長として料理人になることを志した。それは君の料理を食べた人が笑顔になってくれることが堪らなく嬉しかったから。

君にとって料理は誰かを笑顔にできる魔法のようなもので、生まれつき使える錬金術よりも特別なものだと感じていた。君は料理でたくさんの人を笑顔にできるようになりたいと思っているし、そうではない料理を許さない。

願い：料理で人を笑顔にすること。

PC①／情報深度：2

君は生まれつき味覚に関する記憶だけは誰よりも正確だった。だから実父の顔は覚えていなくとも、作った料理の味はどの味よりも間違えようもなく覚えている。君はこうして見習い料理人として様々なレストランで働いていれば、いつか父の味に出会えるのではないかと微かに期待しているのだ。自分が料理を好きだからこそ、最も強く焼き付いた味をもう一度確かめてみたい。今も舌が覚えている味を作った人に会って、あの味を再び口にしたいと心のどこかで願っている。

秘めた願い：父親と再会し、その料理を食べること。

PC②／情報深度：1

君は20代だった頃、色々な幸運と少しの無理のおかげで自分のレストランを持つ料理人だった。順風満帆とは言えないが、支えてくれる妻のおかげでゆっくりとだが客を増やすことができていた。

生まれたばかりの子供もいた君は、ここからさらに自分の店を繁盛させなければと考えた。そこで、誉められた店はたちどころに人気店の仲間入りを果たすという、人気のレストラン評論家に頼ろうとした。

自分の腕に少なからず自信を持っていた君は、店を訪れた評論家に己が作れる最高の料理を提供した。だが、あっさりと三流料理人の烙印を押され、君の店からは客が消えてしまった。そうして店を失い家族の元を去った君は、料理人としての自信を喪失した。

できることなら「キッチンラビオリ」で、かつてのように自分の料理人としての自信を取り戻し、いつかのように自分の店を持つ料理人に戻れたらと思っている。

願い：再び自分の店を持つこと。

PC②／情報深度：2

君が自分の店を失い、妻と別れて以降、子供とは一度も会えていない。人伝に聞いた話では、妻は再婚相手を見つけ、新しい父親の下で子供は問題なく生活できているようだった。

自分がいなくても子供が元気だと知った君は、家族のことを考えないように生きてきた。しかし、数年前に別れた妻からあの子が料理人の道を選んだと手紙で伝えられ、君はほんの僅かな期待を抱いてしまう。どこかのレストランで料理人として働く我が子と再会できるかもしれない。そんな一縷の望みにかけ、「キッチンラビオリ」で臨時コックとして働くことにした。

かつての君は子供に「料理とは食べた人を笑顔にするものだ」と教え、その子は今もその言葉を信条に料理人を目指しているらしい。だとすれば、たとえ今は料理人としての矜持を失っていたとしても「人を笑顔にする料理」を大切にしなければと決意した。この一流レストランでも自分の料理を貫き通すことができれば、再び我が子と会った時にも胸を張れるはずだ。

もう一つの願い：自分の料理を貫き通すこと。

PC ③ / 情報深度：1

君の本職は料理雑誌の記者ではなく、レストラン専門のスパイだ。

金で依頼されれば、取材と称して人気店を訪れ、その店が使っているトイレットペーパーから隠し味の一滴まで、あらゆる情報を探るのが仕事である。

今回は某飲食店グループ企業からの依頼で、「キッチンラビオリ」と玄田正一の情報を探りに来ていた。

特に重要なのが、他の料理人がどうやっても再現できないと言われていた、玄田正一の作り出す味の秘密だ。

君は優れた舌を持ち、どんな料理であっても使われている食材を見抜くと界限で評判だが、玄田正一の料理は未だに暴けていなかった。取材という名目で調べられるチャンスを逃してはならない。必ず「キッチンラビオリ」の美食の謎を解き明かさなければ。

目的：「キッチンラビオリ」の味の秘密を知ること。

PC ③ / 情報深度：2

レストラン専門のスパイになる前、君は世間で多少は知られたレストラン評論家だった。自分の味覚に自信を持っていた君は、容赦なく数多くのレストランを評価してきた。その影響で人気店となる店もあれば、客足が遠退き消えていく店もあった。当時の君はそれを気にもせず、周囲に煽てられるままに生きていた。

PC ②という男のレストランを評価することになった時、そのレストランのライバル店から報酬を出すから PC ②という料理人に三流の評価を下してくれと頼まれた。その後、君が酷評した PC ②の店はしばらくして消えてしまった。それを知って初めて君は、自分の行いが間違っていたことに気がついた。

己の味覚に嘘をついた自分が許せず、君はレストラン評論家を辞めたが、他に秀でた才能もなく雑誌記者のフリをしながら生きてきた。もう二度と自分の味覚が原因で他人を不幸にすることがないように、美味しいものとは誰かを幸せにするものなのだから。

秘めた決意：人を幸せにしない料理を認めない。

情報カード

No.1 厨房の出来事

君が手際よく調理を進めたおかげで厨房には少しばかりの余裕が戻ってきた。

「あんた、まるで魔法みたいな早さで作るじゃないか。ウチの料理長と良い勝負だぜ」

作業の合間に話かけてきたのは、先程君がフォローした同僚だ。

「料理長もビックリするくらいはえーんだよ。よくあの人が実は人間じゃないんじゃないかって言われるくらいだよ、今度見てみるといいぜ。まるで機械みてえな正確さの包丁捌きなんだ」

男からは玄田正一への純粋な尊敬が感じられる。

「まあ技術は教えるものじゃないってのが料理長の主義らしくて、誰も教えてもらったことはないんだけどな。あんたもできるもんなら料理長の腕を盗んでみたらどうだ？」

そんな無駄話をしているのを他の従業員に咎められ、男は自分の持ち場にそそくさと戻っていく。

人間じゃない。機械のようだ。男の言葉はまるで玄田を自分と違う生き物だと言っているようでもあり、君の記憶に妙に残った。

【以下ディレクター PC (+演出手助け PC) のみ閲覧可能】

厨房の忙しさが落ち着く少し前、君も自分の持ち場で食材と格闘していた。そんな中、突然玄田正一に呼び止められる。

「君、その料理は私が最後に仕上げをする決まりなんだ」

その言葉が、ちょうど出来上がった料理を皿に盛り付けようとしている君を留まらせる。君の側までやってきた玄田正一は、懐から小瓶を取り出すと中身を振りかけた。それは君の知っているどんな調味料でもないように見えた。

「これは私の隠し玉なんだ。他の料理人にはない私だけの武器だから、残念だけど君にも教えられないよ」

君がよく観察しようとする前に、玄田正一は調味料の入った小瓶をポケットに戻してしまう。だが君は小瓶に貼られたラベルの文字を見逃さなかった。そこに書かれていたのは「試作 XX 号」の文字。間違いなく、普通の調味料には使われないはずの言葉である。

ジョーカー レシピノート

【錬金調味料：試作 99 号】失敗。複数の毒性を持つ植物の根を使用。料理に僅かな苦味が生じた。

【錬金調味料：試作 100 号】失敗。稀少な鉱物を使用。料理に金属臭が 10ppm 生じた。

……………何ページも試作と失敗の繰り返しが続いている。

【錬金調味料：試作 XXXX 号】成功。鮮度の高い成人男性の背骨を粉末にし、私の錬金術で加工することで人間の脳に食による多幸感を感じさせる成分を持つ調味料が完成した。これまでの試作のように、料理のバランスを崩さない完全な無味無臭でもある。この先は試作 XXXX 号を基に発展させていくことにしよう。

No.2 先達からの忠告

「お前まだこの店来てからそんなに経ってねえよな。じゃあアドバイスっていうか忠告しておくぜ」

頼まれていた雑用を終えて厨房に戻ってきた君に、雑用を頼んだ同僚は真面目な顔で話かけてきた。

「ウチの店長は基本的に優しいし、この店も忙しいがそれに見合う給料が出る。だけどな、店長のレシピを暴こうとは絶対にしちゃいけねえぞ。これは倫理的にどうこうって話じゃない」

男の顔には明確な恐れと感情が浮かんでいる。

「以前ウチで働いていた料理人が店長のレシピを盗もうとしてたんだ。俺たちは冗談だと思って聞き流したが、そいつは数日後店からいなくなった。店長は一身上の都合で退職したと言ってたけど、俺は見ただよ。いなくなる前日にゲル状の怪物に襲われて溶かされたそいつの姿を」

その光景を思い出したのか、彼は自分の身を抱くように震えた。

「アレが店長と関係してるのかなんて俺にはわからねえ。ただ厄介ごとに首を突っ込むのはやめておけてことだ」

そう言い残すと同僚の男はさっさと自分の仕事に戻っていった。

【以下ディレクター PC (+演出手助け PC) のみ閲覧可能】

君は思い出していた。雑用を頼まれて入った倉庫に残されていた、常人には捉えることのできない痕跡を。君が乱雑に積まれたダンボール箱の中から目的のものを持ち出す為、錬金術を少し使った影響だったのかもしれない。君以外の誰かが使った錬金術の残り香のようなものを君は見つけてしまっていた。それも一度ではなく、日常的に使用し、こびりついているような痕跡だ。ここに入れるのは店の関係者だけでなのだから、ずっと前からこの店で錬金術を使う者がいたのだ。同僚の言っていたゲル状の怪物、それが錬金術師の作り出したゴーレムだとすれば……。

No.3 ゴーレムの残骸

君は襲ってきたゲル状のゴーレムの残骸を調べていた。この残骸から君を襲わせた者を特定するのは難しいが、使われている材料から何かしらのヒントが得られるのではないかと考えたからだ。しかし残骸を調べたことで君には新たな疑問が浮かんでいた。それは使われていた素材が、この店で提供されているスープとほとんど同じものだったからだ。普通の錬金術師ならば、そんなものをゴーレムの素材として使わない。つまりその錬金術師は、何かしらの目的があって「キッチンラビオリ」のスープと同じ材料でゴーレムを作ったのだ。その目的とはいったい何なのだろうか。

【以下ディレクター PC (+演出手助け PC) のみ閲覧可能】

君は「レシピノート (ジョーカー)」を手に入れた。

ゴーレムの残骸を調べ終えた君は、持ち出すことに成功した玄田正一のレシピノートを読み始める。そこには基本的なレシピ以外にも、玄田正一が「仕上げ」として使っている調味料についても詳しく書かれていた。

詳細は「レシピノート (ジョーカー)」に記載。

No.4 客の評判

テーブルの片付けが一段落してくると、ちょうど会計を終えて店を出ていくところの客に話かけられた。

「玄田シェフの料理はいつ来ても美味しいね。本当に 365 日変わらない味を提供できるのは凄いことだよ」

ただねえ……と常連らしき客が言葉を続ける。

「ごこの料理は美味しいだけで、食べる人のことを考えていないんじゃないかって思う時があるんだよ。間違いなく美味しいはずなのに、食べ終えてから思い出すと好みの味じゃなかったみたい……すまない、変なことを言ってしまった。あ、素人の感想だから玄田シェフにはこんなこと言わないでいいからね」

それはあたかも、玄田正一の作る料理は味が優れているから美味しいのではなく、客に美味しいと思わせるカラクリがあるとでも言いたげだった。そんなことは普通の人間にはできないだろう。

【以下ディレクター PC (+演出手助け PC) のみ閲覧可能】

常連の客から聞いた内容が気になった君は、片付けた皿に残っていた料理のソースを少しばかり舐めてみた。それはただ美味しいと思わせる味。食べる人間にどんな味好みがあろうと、美味しさを感じさせるのものを料理と呼んでもいいだろうか。ただの料理人であれば気がつくこともなかったが、錬金術師ならばわかってしまう。錬金術によって作られた、脳に直接「美味しい」と思わせる違法な薬物のような調味料。この料理には、そんな料理そのものを否定するようなものが使われているのだと。

エネミーデータ

Lv. 4	料理の怪物			身体 60	意思 40	神秘 30
	No	コスト	錬金術	効果		
①	4	オードブル・パンチ	任意のキャラのすべての属性に「5D>5D」DMを与える。(アタック)			
②	3	スープ・カッター	ランダムなキャラのランダムな属性1つに「5D>5D」DMを与える。(アタック)			
③	7	デザート・ショット	ランダムなキャラのすべての属性に「3D>3D」DMを与え、すべての術のストックを「-1」する。(アタック)			
④	6	口直し	自身に対する攻撃のロールダイスを「-3D」する。(サポート/自身ロール前)			
⑤	4	下ろせ	自身のすべての術のストックを「+1」する。(サポート/自身/開始時)			
⑥	7	メインディッシュ	すべてのキャラのランダムな属性に「4D>4D」DMを与える。この術のストックが「12」以上の場合、ロールダイスとビックダイスを「+6D」する。(アタック)			
◎【隠し味】			◎【おかわり】			
すべての属性がブレイクされた時、「場転の時：秘された味」が始される。			1ラウンドに2回まで同じ術を使用できる。			
<p>玄田正一が作りあげた”料理の怪物”は、あらゆるモノを喰らって至高の料理へと進化していく。だがそれが完成した時、この料理を食べてくれる者はどこにもいないだろう。</p>						

Lv. 1	シチュエーション1 テーブルマナー・ショック		シチュエーション解決方法
	アクション		任意の属性に合計で「20」以上のDMを累積で与える。
	衝撃波	すべてのキャラのすべての属性に「10」DMを与える。	効果
マナーを心得ぬ者には、相応のペナルティを。			

Lv. 1	シチュエーション2 アペリティフ・ウェーブ		シチュエーション解決方法
	アクション		すべての属性にそれぞれ「10」以上のDMを累積で与える。または、このシチュエーションが発動する。
	妨害	すべてのキャラのすべての術のストックを「-10」する。	効果
<p>ケネスの部下たちが展開する術式。ケネスを中心に、球状にランダムな収縮を繰り返している。ケネスと部下以外のエリクサーを検知すると自動で爆発する。</p>			